

第22号 華山会報

平成21年4月11日
財団法人華山会

客坐掌記（天保三年）に描かれた肥満英国人

京都大学人間・環境学専攻教授 松田 清



昨年夏、久しぶりに田原市博物館を訪れた。以前調査したことのある田原藩旧蔵蘭書のひとつが我が国最初の西洋哲学史要綱ともいえる高野長英『西洋学者之説』の種本ではないかと思ひ返し、確認するのが目的だった。残念ながら期待はずれに終わったが、渡辺華山が蘭書から肥満英国人図を模写した「客坐掌記」（天保三年）は同館の所蔵と知らされた。その後、再訪の機会が得られず、今年三月一日になって原本を初めて閲覧することができた。

本文墨付九十五丁を通過すると、蘭学塾「日習堂」を開いたばかりの坪井信道が「壺井泰道」の名で記されていたり、初めて出会う高野長英が、高野長永、麹町」と書き留められていたり、天保三年における華山の蘭書知識や蘭学者との交流をつかがわせる記事が散見する。

問題の肥満英国人図は第五十二表に描かれており、その前の丁に典拠となった蘭書について次のような解題がある。

蘭本リンナウス三十七本 獸類 鳥類 魚類 虫類 介類 草木類 金石類
リンナウス八度逸国ノ人、其父礼典ノ字ヲ以鳴、リンナウスコレヲ伝フ。ナウス性鈍劣ニシテ其字ヲ繼コト不能、ヨリテ是ヲ捨テ履ヲウルムニ与フ、又履ヲサムルコト不能、其性来草木ヲ愛シ常ニ山野ニ出テ草ヲ取ク以下文が中断

この「蘭本リンナウス」はアムステルダム医師マルティヌスハウトウイン（一七二〇—一七九八）が編纂した『リンネ氏の体系による博物誌』アムステルダム一七六一—一七八五刊、全三十七冊のことである。この大著は完本の場合、銅版図版は全一九六葉、手彩色を施した豪華本もある。文政六年（一八三三）に來日したシーボルトが座右で使用していたため、長崎の阿蘭陀通詞や門人たちを介してこの蘭文博物誌のことが江戸の蘭学界にも知られたようである。



その第一部第冊、人間および哺乳動物の銅版図版十図のうちから、第 四 図（肥満英国人図）、第三冊第 二 一 図（鹿）の三図をこの「客坐掌記」に模写している。

解題に見える植物学者リンネ（リンナウス）はラテン語名の略伝はスウェーデン人のリンネをドイツ人としたリ、リンネの父が牧師であることを、礼典ノ字ヲ以鳴」と誤訳したり、誤りが多く、典拠も不明である。肥満英国人図を原図と比較すると、人物模写としては人物の雰囲気をよく伝えているが、日欧の画法の違いから原図に描かれていた影が省略されている。欧文模写「EDWARD BRIGHT een zeer zwaartvuldig sic: zwaartvuldig man Engelsman」には「エンアルド、ブリグト、マン、セル、スールレイタ、マンデルマン」と読み仮名を付し、「箇ノ甚肥満ナル「マンデルス」人」と訳語を添えている。zwaartvuldigはzwaartvligの誤記である。

この超重量の英国人エドワード・ブライイトは原書の本文によれば、エマックス州モルデンの商店主で体重が六〇九ポンドあり、一七五〇年十一月十日に二十九歳で死す。その外套は大人七人がかりで着込みボタンを掛けられたという。

華山は、蘭本リンナウスをどこで閲覧したのか不明である。しかし、天保三年当時、第二巻の「肥満英国人図」を含む人種説や奇形説を抄記した「林妨私燕乳動物篇」（おそらく宇田川榕菴訳）が写本で流布していた形跡があり、華山もそうした蘭学情報を手にしたかもしれない。シーボルトと交流のあった福岡藩の蘭学者安部竜平が原書のほぼ同じ箇所を、人譜」と題してより正確に翻訳したのは天保五年三月のことであった。これには第 四 図一個の超重量なる諸厄利亜人「エマアルドベリクト」のほかに、第 四 図「双児連接之図」（シヤム双生児）も陰影部分も含めて原図の極めて精密な模写図がみえる。



田原城桜門前

華山の里を歩く(ガイドの体験から)

ふるさとボランティアガイド「たはらの風」

事務局長 林 和彦

「たはらの風」は設立から八年経

った。田原を訪れる人たちを案内して歩くのだが、年々その回数が増加している。訪問者の中味もいろいろで、一人から五〇人近くまで、電車で降り立つ人、バスで来る人、マイカーのグループ等々。平成二十年度は、大小合わせての対応で四十回ほど出動した。常に「おもてなしの心」で接し、リピーターになっていただけのように努めているが、体験の中で考えさせられた点を一、二挙げてみる。

一、お国自慢は慎しむ

田原人が、華山を誇りに思い、ふるさとを愛していると同様に、訪問者も自分の町やふるさとを愛している。外来者から「田原はいい所ですね。」と言われるのは嬉しいが、自分から「田原はいい所です。」と評価したら、相手に失礼である。私の

ように、田原で生まれ育った者は、話の中につい「華山先生」と出る。時々、「歴史上の人物には敬称を付けないのが一般的でしょう。」と指摘されることがある。

長州の人が「松蔭先生」と言つると同じであるが、やはり、外来の人には、あまり好ましい響きではない。気を付けるべきことである。

二、華山の知名度は、意外に低い。

訪れる人々の目的も様々、年令・階層も種々雑多。華山についても「名前を聞いたことはある」といった程度の人も多い。

岡崎以西からの来訪者には、この傾向が顕著である。西日本には、松蔭以外にも、高杉・龍馬・桂・西郷……と言った歴史に輝く人物が多く、その陰に隠れて、華山を知る人が少ないのである。

三、華山は「田原の人ですか。」

こう問われるのが私は一番辛い。池ノ原へ案内すると、「華山の生家はどこにあるのですか?」「生家の跡は?」と問われることがある。城宝

寺に墓地はあるが、菩提寺ではない。池ノ原も藩から拝領した地であり、自刃の地というだけである。「華山は田原藩の人ではある」が、田原の人と断言できるかどうか大問題

『守因日歴』にも、太平洋の海濤の響き「海鳴りが、しばしば出てくる。西風の音が気になることも日記に書かれる。松崎慊堂宛の手紙には「西風が日々吹き抜け、暖寒の差が大きく凌ぎがたいところ」という趣旨の文言もある。華山は「田原の空気を吸い、水を飲んで育った人ではない。所詮、江戸の人かなあ。」と思わざるを得ない。

四、思いこみは危険

華山が江戸から護送されて来た時「胸丸駕籠で……」と話した時、すかさず「私は駕籠について少々研究しています。罪人であろうと武士である以上、胸丸駕籠はありえませんが、田原には証拠があるのですか?」と、反論されたことがある。思いこみや知ったかぶりの説明ほど恐いものはない。

目次

題字「華山会報」 元華山会理事 小澤耕一

P 寄臺記(天保年)に描かれた肥満英園人 松田 清

P ふるさとボランティアガイド 「たはらの風」事務局長 林 和彦

P 目次

P 画家渡辺華山の心象 『鍾馗図』

P 「外国事情書」

P 渡辺華山

P 『俳画冊』観賞d

P 田原市博物館から「案内

P 華山の田原行(六)

P 財団法人華山会 田原市博物館 から「案内

画家渡辺華山の心象

鍾馗しょうきゆう図

天保五年（一八三四）

紙本墨画淡彩

縦一一九・〇cm 横四七・〇cm

田原市博物館蔵

疫病神を追い払う神、

鍾馗を描く。唐（六一八

〜九〇七）の六代玄宗皇

帝が夢で見たことが起源

となっている。終南山

（中国陝西省西安の南方、

秦嶺山脈中にある一峰で

古刹・名勝が多い山）に

いる鍾馗が、小鬼を捕っ

て食べ、そのことから皇

帝は病気がなおった。目

が覚めて今見た夢の人物

を、呉道子（六八〇頃〜

七五〇頃）に描かせた。

天下のおとろえつつある

災いを除いた。このことから、後の

世まで、魔除けとしてよく描かれ、

人形や瓦にもなっている。その姿は、

大きな眼に多くのひげ、黒い衣服に

冠をつけ、剣を抜いて、小鬼をおし

つぶすというポーズが定番だ。

この作品は勢いよく筆を走らせて

描き上げたもので、墨の濃淡で人物

の安定感、存在感を引き出している。

落款は「甲午端午前一日華山人」。

端午の節句の時期に、無病息災を願

って飾られたものであろう。このよ

うな作品は、多くの画家が描いてお

り、たくさん需要があったのである

う。また、需要とは別に華山はこの

正義感あふれる鍾馗が好きであつた

のであろう。中国画題であり、本場

中国では、いろんな場面が描かれ、

なかには、海外の美術館に収蔵され

てもいる。日本でも室町時代の画僧、

雪村周継や、鎌倉の円覚寺の「鍾馗

図」で有名な武人画家、山田道安な

どの画家が描いている。

なかなか薬も乏しかった時代のこ

の前向きに生きるためのアイテムを

今の時代でも大切にしていきたいも

のだ、と思う。

田原市博物館学芸員 磯部奈三子



渡辺崋山

「外国事情書」⑥

研究会長 渡辺 亘 祥

商船二万二千二百四十二艘、積荷ノ数二百五十八万九千六百六十四桶、水主百万五千四百四十四人、ニューエンボイス、又フランスソン三万五千八百六十四艘ト有之。兵備八海陸ヲ分チ、陸軍他国ニ比スレバ甚寡少ナリ。千八百三十二年、天保三年、ノ調ベニ、歩騎両兵合シテ十万人、海備ノ兵三万人、敵手四千人、海軍八皆外国属領ノ為ニシテ、此国尤多トナス。然レドモ治乱ニヨリ多少有リテ、千八百十三年、文化十年、欧邏巴大乱、二八、軍船大小一千二百六十六艘、今時三分ノ一ヲ減ズ。右ノ外、東印度領八百二十二艘、印度領大船八無之ヨシ、大船二八、大船二百二十坐ヲ備ヘ、小船八五十坐ヨリ三十八坐ヲ備フ、ニューエンボイス。右大艦古ヘハ、敵九十坐ヲ懸ルル処、後年追々雄大ニ罷成候得共、百二十坐ヨリ大ナルハ未承リ不申。尤中軍左右翼ニテ小大有之由ニ御座候。右之外、印度領陸軍八歩兵六十一部、騎兵十六部。欧邏巴歩兵三部、ココニ欧邏巴歩兵ト別ニ認有之候得共、余皆印度人ト相見候。竜動夜戌一万二千所、此夜戌ト申ハ、ヘイナクトト申、夜ヲ守リ候役ニテ、兵士ヨリ出候哉、未審候。諸商館ニモ尽ク有之。印度領ナド八十七一所有之由ニ御座候。右ハニューエンボイス并略史。

商船の数は、二万二千二百四十二艘、積荷の量は一五八万九千六百六十四トン、船員の数は一 万五四四四人。「以上は『ニューエンボイス』の記載ですが、『フランスソン』には、船数が二万五八六四艘とあります。」兵備は海陸に分かれ、そのうち陸軍は、他国に比すればはなはだ兵数がすくなく、一八三三年「天保三年」の調査では、歩兵・騎兵あわせて十万人、そのうち海岸防備用員三万人、砲手四千人となっております。海軍は、すべて在外領土の防備を目的とし、世界でもっとも艦数が多いということです。しかし、平時と戦時とは数に差があり、一八一三「文化十年」のヨーロッパの大乱のさいには、軍艦の数は、大小あわせて二二六六艘でしたが、現在はその三分の一を減じております。そのほか、東インド洋に二二三艘ありますが、「ただしこれには大船がふくまれておりません」。大型艦は大砲二一 坐を備え、小型の軍艦のはあい、五十坐か

ら三十八坐を備えることになっていきます。『ニューエンボイス』。大型艦のばあい、むかしは備砲がせいぜい九十坐ほどのところ、のちに備砲の数が増すようになりまし。しかし一二 坐より多いものは聞いたことがありません。もっとも、艦中の左右翼によって備砲の大きさが異なるということです。以上のほか、インド領陸軍は、歩兵が六十一連隊、騎兵十六連隊、ヨーロッパ人歩兵三連隊があります。「参照した洋書には、『ヨーロッパ人歩兵連隊』としたためてありますから、他はみなインド兵とおもわれます。」またロンドンには、「夜戌」「夜衛」の屯所が一万二千カ所あります。「この「夜戌」というのは、「ヘイナクト」の訳語で、夜番する役をいいますが、兵士が勤務するかどうか、その辺のことはつきりしません。諸商館にもすべておかれ、またインド領には屯所が七十一カ所あるとのことです。『ニューエンボイス并略史。』

一 魯西亜八原一州ノ名ニ御座候テ、コレヲ三部ニ分チ、赤魯西亜、白魯西亜、黒魯(西)亜ト仕、莫斯哥ト申処ニ都有之ニ付、又莫斯哥未亜国ト称シ候処、按ズルニ、ロシアト申ハ、古昔スラボニヤ国(今ノ翁加利ヤノ地)ノ諸侯ロシアト云モノ、都タル地ナル故ニ、コレヲロシア又リュスト申シ、皆音ノ転ジタルニテ候。此ロシア、今ノ波魯尼亞ノ一部、波赤米亜ノ一部ヲ領シ、合テコレヲロシアト申候。本国八即、黒ロシアニテ、赤白八即、右ノ二国ニ御座候、唐土ニテ俄羅斯、羅刹、老鑰、老七等、数名有之、阿蘭陀ニテ、リュスランド等相称シ候モ、皆本国ニテ、ヲロシアスコイ、又リュツシヤト申音「ノ」転訛ニ御座候。

一、ロシアとは、がんらい一州の名で、これを三つに分けて、赤ロシア・白ロシア・黒ロシアといひます。モスカー(モスクワ)というところに都があるの、別名「モスコビヤ国」とも申します。「おもつにロシアという名は、昔スラボニヤ国、いまのヤンカリヤ(ハンガリーの地)の諸侯ロシアという者がここに都をおいたことに起源をもち、これから「ロシア」または「リュス」という名がおこつたので、みな「ロシア」の音が転化したものです。このロシアは、現在のポロニヤ(ポーランド)の一部およびボヘーメヤ(ボヘミア)の一部を領し、その所領をあわせて「ロシア」と申しました。本国を黒ロシアといひ、赤ロシア・白ロシアといふのは右の二国のことです。唐土では、「俄羅斯」「羅刹」「老鑰」「老七」など、さまざまの名でよんでいます。オランダで「リュスランド」などと称するのみなロシア語の「オロシアスコイ」、または「リュツシヤ」という音の転化したものです。

ペートル以来、俄二大國ト相成、今時八益新彊相開ケ、コレヲ自称致シ、大帝露西亞國、コロトケイスルレイキリュスランド、ト申候。歐邏「巴」中、帝國ト稱シ候モノ、独逸都國・杜爾格國ニ御座候。杜爾格八教道別ニ相成リ、自ラシユルタント稱シ候得共、洋人共矢張コレヲ帝ト申候。右諸國割拠任ナガラ、名教モ自然ニ相行ワレ、漫ニ潛立ハ仕ガタク候。古へ教道広カラス、物理審ナラザルノ世ハ、見ル所ヲ以テ大小仕候得共、今時四方已ニ明力ニ相成候上ハ、誰力此地球ノ主ニ相成ベク哉。夷王ノ志ヲ勵シ、洋人ノ規模ヲ広メ、憂勤ヲ以、内ヲ脩メ外ヲ制シ候事、全クコトニ可有之候。

この國は、ペートル大帝以来、にわかには大國となり、近年は新領の開拓がますますさかに行われ、これらをあわせてみずから大帝露西亞國「コロトケイスルレイキリュスランド（ロシア大帝國）」と稱してあります。「コロトケイスルレイキリュスランド」は、ドイツ國とトルコ國であります。そのうちトルコ國は、他の諸國とは宗教を異にし、國王を「シユルタン」（サルタン）と稱してありますが、ヨーロッパ人は、やはりこれをも「帝」とよびます。右のようにヨーロッパでは諸國が割拠しながら、名分がそれなりに重んぜられ、みだりに帝王の名を稱することができません。古代のように教道がひろまらず、物理に通じない時代には、一國をもつて天下とみなすことも許されたではありませんが、しかし今時のように、世界中がすでにくまなく明らかになつては、さうした態度は許されません。問題は、だれが世界の主になるかにかかつてあります。ヨーロッパ諸國の國王が野心をもち、國民の視野をひろげ、懸命に内治・外交をとりしきるのには、この目標があるがゆゑであります。

此國 五大洲ノ内、今時三大洲ノ北部ニ相亘リ、西ハ独逸都、李漏生、蘇亦齊、ノ界ヨリ、南ハ杜爾格、百爾西亞、黒海、高北海ニ界シ、東ハ独立韃旦、唐土、口皇國諸島ニ界シ、東ハ北亞墨利加ノ西部、アリヤスカ半島ヨリ奥地ノ多分ヲ領シ、東經三十五度、四十度ヨリ、按ズル、三十五度ト云モノハ、近來尚西方ヲ併吞致候歟、二百二十度ニ相亘リ、北緯三十九度、四十九度ニ至ル地無之。或ハ近來南部ヲ併吞致候歟、ヨリ七十八度ニ亘リ、其縱三千七百里、皇國ノ里法ニテハ、大凡六千里、横六百里、大凡千里、地ノ方平積ニテ、三十四万五千三百三十里、同上ノ割合、地球全面八、九分ノ一ヲ領シ申候、ブーランツソン。

ロシアの領域は、五大州のうち、三大州の北部にわたつており、西はドイツ、プロイセン、スウェーデン（スウェーデン）と国境を接し、南はトルコ、ペルシヤ、

黒海、高北海（カスピ海）、東は独立韃旦、唐土および日本列島と境してあり、さらに北アメリカの西部にあるアリヤスカ（アラスカ）半島から奥地に広大な領地をもち、東經三十五度ないし四十度から「三十五度とあるのは、近來さらに西部の領土を征服したのでしようか」二百二十度にわたり、北緯三十九度「地中には三十九度にいたる地域に、ロシア領が示されてありません。あるいは近來南部に領土を獲得したのでしようか」から七十八度にわたり、縱三千七百里（日本の里法で、おおよそ六千里）、横六百里（おおよそ千里）、面積にして三四万五二三、地球の全面積の八、九分の一を領してあります。『ブーランツソン』。

人口四億百万、略史、千八百二十四年、文政七年、十一月六日人籍ノ惣計ニ、五千三百七十六万八千、又一方ノ勘定ニ、一方ト申八、兩所へ命ジ相改候処、相違有之ニ付、兩計トモ取用ヒ候旨ニ候ヤ、其書ノマ、ニ認申候、五千九百万人。此國、人ヲ蕃息フヤス、セシムルコト、年々五十万人ヲ増益、マス、ス。ブーランツソン。人別ハスベテ古書ヲ用ヒ不申。略史八千八百二十四年、文政七年ニテ、ブーランツソン八千八百二十六年、文政九年ニ御座候、人別抜群ノ相違ニテ、ブーランツソンハ歐邏巴領ノミノ人籍ニテ候ヤ、略史ハ屬領ヲ合セ惣計仕候哉、未考へ不申。又人別惣計ノ法ニ、軍官船師等ハ除キ候事モ有之、又庶民ノミノ計モ有之、皆者不申候。

人口は、四億百万あります。『略史』。また『ブーランツソン』に見える、千八百二十四年（文政七年）十一月六日現在の戸籍帳による総計だと、五三七六万八千人です。また別の総計「別の総計」というのは、二つの役所において調査したところ、相違があるので、それらの総計をともに載せたという意味なのか、わかりかねますが、書物のとおりには記しました。には五九、万人とあります。また同書には、「この國、人を蕃息せしむること、年々五十万人を増益す」と記されてあります。「人口の記載は、すべて古書を用いず、新書によりました。『略志』は一八二四年、文政七年に刊行されたものです。『ブーランツソン』は一八二六年、文政九年に刊行されたものです。両書に記載された人口は、その差がはなはだすぎますが、『ブーランツソン』の記載はヨーロッパ領のみの人口でしょうか。『略志』は属領をもあわせての総計でしょうか。考えつきません。また人口総計の法に、陸海軍の兵数を除く場合もあり、また庶民のみを数える場合もあり、いずれなのか、まったくわかりません」

此國広大ニ候得共、極寒不毛ノ地多ク、就中東方最甚シ。新都ペートルスヒヨ

ルグ八第九月 我七月 未ヨリ翌年第五月 三月 迄冬ニシテ、北及東方ニ至ルニ隨ヒ、冬時愈長シ。依之、夏期 アツサノゴ 尤短ケレドモ、暑氣ハ酷シク ソンムル寒暖計ノ表ヲ考ルニ、我五月ノ度 當リ申候、キリム熱ト申病行ワレ候由。其地大抵高山雄岳 ヲ、タケ 相連リ、湖水大河漫流 サタマラヌミツミチ 致シ、南方耕スベキ地荒蕪ニシテ、唯百卉繁茂 イロイロクサシゲル ス。ウクラニテノ地ハ豊饒ニ御坐候。北緯五十八度以上ノ地ハ絶テ林野無之、只散木 ヤクニタ、又キ ベシーン 梔杓子ノ類 ・蘇苔 コケ ・玉石・鳥獸ヲ産ス。アルカン ゲル 四十度ノ地ハ大小麦・蔬菜 ナルルイ ヲ生ジ、北海ハ鯨および魚油を産出シヌ。

この国は広大ではありますが、極寒不毛の地が多く、なかんずく、もつともはなほだしいのは東方です。新都ペートルスビュルグ(ペテルブルグ)は、九月「わが七月」未より翌年の五月「三月」までが冬で、北方および東方にいたるにしたがい、冬期がますます長期にわたります。これにたいして、夏期はきわめて短いものの、暑さはなほだしく、『ソムル』の寒暖計の表によれば、わが国の五月の気温とおなじで、この時期には、キリム熱(クルミヤ地方特有の熱病)と称する熱病が流行するということです。その地の多くに高山雄岳がたつらなり、湖水や大河が勝手気ままな水路を作つて流れ、南方の可耕地は荒地のまま捨ておかれて、雑草の生えるにまかせてあります。ただウクラニ(ウクライナ)の地のみが豊饒であります。北緯五十八度以北の地は、林野がまつたくなく、ただ無用の灌木や、ベシーンとよばれる梔杓子(もみじいちご)の一種、こげや玉石、それに鳥獸が生息しているのみです。東経四十度のアルカングルの地には大小麦や野菜が産し、北海は鯨および魚油を産出します。

南地沃土 ヲキツチメ ニシテ、菓穀 キノミクサノミ ヲ収ル多ク、牛馬・家猪 ヲタ 夥ク、梳帚 クシバケ ヲ作り、大利ヲ得ル。蜂蜜蠟 ハチミツノロウ・羊駝 ヒツジタムマ ・鉄銅・礬石・山塩 ヤマシロ ・石灰 イシハイ・硝石・烟草・葡萄酒・山油 クサウツノアブラ ・石鹼 其他織工ノ類諸国ニ下ラズ 略史。新疆北亞墨利加ノ西北部諸地ハ亞細亞屬国ヨリ広大ニシテ、サガリヤ諸州ニ御座候処、高山大沢皆太古 カミヨ ノ雪消尽 キハツクル 不仕、其間夷落 エビスヒトノコヤ 有之、獸皮交易ノ商府ヲ立、追々相開ケ候得共、魯西亜屬領中第一ノ寒国ノ由ニ御坐候。右ノ通天国ニ付、人種モ又一ナラズ。

これにたいして南の地方は地味が肥え、果実や穀物が多量に産出し、牛・馬・

豚などの家畜がおびただしく、くしばけをつくり、大利を得るといわれております。ほかに密蠟・羊・駄馬・鉄・銅・みよつばん・岩塩・石灰・硝石・煙草・ぶどう酒・石油・石鹼、そのほか織物工業の生産は諸国におとりませぬ『略志』。新領土である北アメリカの西北部の諸地域は、アジアの属領よりも大で、これをサガリヤ諸州とよんでおります。この地は、高山大沢の雪が太古のまま残り、その間に土民の部落が点在しております。ロシア政府はここに毛皮交易の市場を設けたので、その結果、おいおい開けるようになりましたが、それでもロシアの属領中では、最寒地のよしであります。右のような大国なので、人種もまた単純ではありません。

即魯西亜・コサツク・ポール・ラッフ・ヒン・レット・エスト・キョール人等 其臬賦 ウマレツキ 習俗 フウゾク モーナラスト雖 歐邏巴ノ中ハ其粗樸野鄙ノ風相変ジ、人品修整シテ學術日々ニ進ム 地学示蒙 略史。魯西亜人ハ形大體強勇ニシテ、能其君ニ忠アリ。撰生簡易ヲ意トシ、薑膏 ツルナ・黎豆 ソラマメ・菜葱 ナネギ・乾魚 ヒモノ ヲ常食トス。旅行ニハ蒸餅 パン ヲ切テ再炙 ニドヤキ シ、提携 モチハコビ ニ便ニシ、コレヲ口ニ含ミ水ヲ飲ム。或ハ麦粉 ムキコガシ 草根ヲ数日ノ糧 カテ トス。風俗酒ヲ好ミ、懶惰 ヲ、チャクナリシヲ、ペートル立テ後、一國コレヲ禁ジ、祭日ノ外 七曜日 酔飽セシムルコトナシ。

ロシア人・コサツク人・ポーランド人・ラップ人・フィンランド人・レット人・エストニア人・キョール人などからなり、その民族や習俗もさまざまです。しかし、ヨーロッパ州内部に属する諸民族は粗樸野鄙の風を變じ、教養を身に付け、學術が日々に進歩をとげつつある、ということが、『地学示蒙』や『略志』に見えております。がんらいロシア人は、身体が長大で強勇であり、君主に忠実でよく義務を果たします。生活様式は簡易を旨とし、つるな・そら豆・野菜・ねぎ・乾魚を常食としております。旅行のさいには、パンを切つてよく焼いて携帯用とし、これを口にくんで水を飲み、食事の代りとなります。あるいはまた、麦粉と草根をもつて数日の食糧とします。飲酒の習慣があり、ために怠惰でありましたが、ペートル大帝が帝位についたのち、これを取り締まり、祭日のほかは無制限に飲むことを禁じました。

是より学芸勸励 ヲツトメハゲム ノ風盛ニ行ワレ、終ニ歐邏巴諸国ニ耽サルニ及



田原城三の丸跡にある渡辺華山頌徳碑（三條美美の篆額）
明治二十三年（一八九〇）建立

ブ。カラメロス。按ズルニ、北地剛毅、ツヨクテカタキ、ノ風ヲ以テ、学芸盛リニ相成、其
実ハ西夷中、セイロウチウ、ノ正大、タゞシクラ、イ、ナルモノ、ヨシ。其為ス所、頗仁義ニ
似テ、絶タルヲ、国ヲ継ギ、廢タルヲ、国ヲ興シ、私郎察大乱ノ後、諸國其蔭、カゲ、ヲ蒙ラ
ザルモノ少ク、コレヨリ歐羅巴中ニ尊信セラル、ヨシ。用兵ハ必勝ヲ見ザレバ動カズ。取レバ
必奪ハレ不申、近頃英吉利モ其風ヲ学ビ候旨、ニューマンノ説。

これ以来、学芸勉勵の風が盛んになり、ついにヨーロッパ諸國に匹敵するほどの
の文明がすんだということが、『カラメロス地志』に見えています。「おも
うにロシアは、北方民族特有の剛毅の気象をもち、そのうえ学芸が盛んになつた
結果、ヨーロッパ諸國の中で、かくべつ正義感がつよいよし。すこぶる仁義に
似た振る舞いをし、王統の絶えた國を継ぎ、廢れた國を興し、とくにナポレオ
ンの大乱後に、ロシアの恩恵をこつむつた國はすくなくありません。そのため
ヨーロッパ諸國の中で、尊信されているよし。用兵は必勝の予測があるときに
かぎり兵を動かし、いったん占領すれば奪われぬよう完璧の防備をします。そ
のため最近イギリスもロシアの風を学ぼうとしているといふことです。以上は
ニューマンの談話です」

宗門、ゲリツシヤ宗『略史』。僧官パトリアルクヲ以テ之ヲ主宰、ツカサドルス。
然レドモ、他ノ教派王国ニ許シ置シム、地学示蒙。キリーキセン、ケリツシヤ、キリー
キセン同シ。按ズルニ、厄勒西亜國ハ古昔、ムカシ、邪宗盛ナリシ地ニシテ、其時ノ一派ヲ國名
ヲ以稱、即カトレイキヲ、邏瑪宗ト申如ニ御坐候。ナラザレバ、帝位を踐コトアタワズ。皇
后若シ他邦ヨリ来レバ、此教門ニ転入、シウシガエ、ス、プーラン（ン）ツン。

宗教はゲリツシヤ宗、ギリシヤ正教、が行われ、パトリアルク（主教）とよば
れる僧官がこれを主宰する、といふことが『略史』に見えております。しかし、
『地学示蒙』には他の宗派をも認める、とあります。ゲリツシヤ宗「おもつに、
ゲロシヤ國（ギリシヤ）は古代に邪宗が栄えた地で、そのときの宗派に國名を
つけて「ゲリツシヤ宗」と称するものと想像されます。それはカトレイク（カ
トリック）をローマ宗とよぶと同様です。」の信者でなければ、帝位につくこと
ができず、もし皇后が他國から王室に入ったばあい、この宗派に転宗するとい
うさだめになっています。『プーランズン』。

つづく

渡辺華山
『俳画冊』観賞 (4)

十八、有明や石川わたる旅がらす

「有明」が季語。季節は秋。「有明月」なども言い、月がまだ空に残っていて、夜が明けてくる頃をいう。「旅がらす」は、定住せずあちこちと旅をして歩く人。「石川」は、石がころころとしている川のことだろう。

句の意味は、
・ まだ月も空に残っていて、次第に夜も明るくなりかけた秋の早朝、旅がらす風の旅人が石がころころとしている川原を渡っていくことだ。(何となく子細ありげであるが、どこへ行くことというのであるうか。)



『俳画冊』のこの絵は、決して上手といえる程に洗練された描き方はされていない。むしろ、さりげなく気軽に筆を走らせたというよつなところがある。芒の左側に三行に書き散らされた文字も同様である。しかし、画面全体の醸し出す俳味は、決して尋常のものではない。芒の葉の濃淡、風に葉折れた葉の様子、左下へとなびく芒の葉が微妙に風を感じさせ、飽きさせない不思議な

力がある。

こうした華山の描写の魅力がどこから来るのかは、言つまでもなく、あの飽くことを知らない、不断の記録魔的なスケッチにある。『辛巳画稿』、『壬午図稿』、『脱壁』、『客坐縮臨』、『掌中縮写』、『客坐掌記』などといったあの膨大な量のスケッチの中にこそその秘密が潜んでいることを忘れてはならないと思う。

十九、行秋や薪一把も庭ふさげ

「行秋」が季語で、季節は晩秋。「薪」はこれからむかえる冬のために蓄えておくものである。何把もつずたかく軒下などに積み上げたりしたもので、こうした様子も冬をむかえる晩秋の頃の風物詩ともいふべきものであった。

句の意味は、以上のような意味で、「行秋や」の「や」という切れ字に、作者の感慨が込められている。

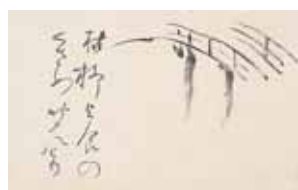


『俳画冊』のこの句の右下には、雌雄二羽の鶏が画かれている。雄鳥は立ち、雌鳥は卵を抱くかのようにかがまっています。この句は何といふこともない取り合わせのようでありながら、これもまた、俳趣に富む図となっている。特に、その省略され

た筆の何とも言えない確かさが、二羽の鶏を存在感のあるものにしていて、ところがすばらしい。

二十、枯柳乞食のくさめ聞えけり

「枯柳」が季語で、季節は冬。寒々とした枯れ柳が北風に枝を吹かれている。先ほどいた乞食が寒さの余りにくさめをしたのが聞こえてきた、というのである。「枯柳」に「乞食のくさめ」が加わって、冬のわびしい枯渇した風景が点描されている。



『俳画冊』では、この句の右に橋の欄干とそれを支える川の中の柱が二本だけ描かれている。他には何も無い。「乞食のくさめ」は、この川の橋の下から聞こえてくるのであろう。橋も総てを描かず、橋のたもと柳の木までも消し去って、それでいて充分にその場の風景や情感を描き出すところに、俳画の省略による妙味がある。

俳句は、もともと省略の文芸である。すべてを描かず、言葉のエキスとなるところだけを切り取って、かけがえない言葉で、提示するところにその短詩形としての特色がある。俳画の手法もまたこれと似たところがある。この画面の橋のようにすべてを描かず、不要なものはすべて消し去って、それでいて尚かつ確かな存在として橋を感じさせる、そこにこそ俳画の俳画たる所以がある。華山の俳画を見ると、そうした俳画の持つ

妙味を十分に堪能させてくれる楽しさが沸々と湧いてきて、つい自らも下手な筆を執ってみたくなるから不思議である。

「下手の書く絵こそまことの糸瓜かな 華山」

二十一、襟さむしこんな夕にさへ雁は行

「襟さむし」「雁は行」とやや季重なりとなったところが気になるが、雁の行く晩秋の頃の寒々とした空の情景がよく伝わってくる。また、「こんな夕にさへ」といった表現はやや思いこみの勝った具象性の欠ける表現で、華山らしくない表現のぎこちなさが出てしまっているところが惜しまれる。



しかし、『俳画冊』の画とこの句の醸し出す俳画の味はすばらしく、炬燵の上にちよんんと座って眠る猫とこの句のもつ寒々とした雰囲気を感じ付けの付け方で仕立てたところはさすが華山であり、与謝蕪村や酒井抱一と並んで俳画の世界を開拓した一人として我々は華山の存在を無視することはできないのである。俳画というと、現在はすぐに蕪村の名があげられるが、華山の場合この『俳画冊』のような俳画作品は未だに世間によく知られていないきらいがある。この『俳画冊』は、そうした意味でも、より高く評価されてもしかるべきではなからうか。

二十二、霜の月山椒のとげも見えにけり

「霜の月」というのは、旧暦十一月。霜の厳しく降りる時期をいう。



この頃になると、秋に実を付けた山椒がそのあと棘をつけて、冬の寒さを凌ぐのである。「山椒のとげも見えにけり」ということは、いよいよ冬の寒さも本格的になってきそうだというのである。句にはそれほど深い意味はなく、ちよんとした挨拶句といつていいであろう。

この句は、『霜の月句画』と呼ばれる色紙ほどの小品の中に五行に分かち書きされている。句の下には寝そべる犬らしきものが描かれている。実に描き方は無造作な感じさえするが、不思議と存在を感じさせるところが華山的なのである。落款は主一落款で、この作が晩年のものであることが自ずと知られる。

二十三、大井川に喧嘩もなくてしぐれけり

「大井川」は、静岡市北部の山中に発し、駿河湾にそそぐ川。古来、東海道の難所とされ、江戸時代には架橋と渡船が禁じられていたので、増水すると川止めになった。渡す、渡さぬでよく喧嘩にもなった。「しぐれ」は、秋から冬に懸けて降ったり、止んだりする小雨。時雨の降る頃になると、大井川も濁水期に入って、水かさも少なくな

り渡りやすくもなつて、おのずと喧嘩も減つたのである。句の意味は、

・大井川も濁水期に入って、水かさも少なくなり渡りやすくもなつて、おのずと喧嘩も減つて、時雨れていることだなあ。ということである。



『俳画冊』をみると、この句は、五行書きされ、画面左上側に長い状差しを担いだ飛脚が、右方へなびく川原のすすきの向こう側を急ぎ駆けていく様子が画かれていて、句の内容とマッチした風景が、実にいい。句の分かち書きも画との配置も実に絶妙なものがある。

二十四、大雪や鼠ひと聲ひるすぎて

「大雪」が季語。季節は冬。

大雪が降って野も山も街も白一色。しんしんと降り積もる雪の前には、人も動物もなすすべもなく、自然の大きな力の前に佇むしかない。家の中の人もこの日ばかりは、外へ出歩くこともなく静かだ、じつとこの大雪の止むのを待っている。

昼が過ぎて雪は止む様子もなく、いささかうんざりしはじめたところ、家の中の静寂をさますかのように、鼠が一声どこかで鳴いた。

どうということもない生活詠であるが、大雪の中に閉じこめられた家の中の重苦しく暗い雰囲気を感じられ、昼過ぎの鼠の一声が妙にリアルで、

その家の情景を鮮やかにする効果をもっている。



『俳画冊』では、画面の右上隅に鶏を描いた絵馬としめ縄飾りが描かれていて、その左下にこの句が磨くように三行書きされている。このことからおそらく正月過ぎの大雪の日の様子を想定してこの画は描かれたものと思われるが、この絵馬にわざわざ鶏の画が描かれているのはやはりこれを描いた年がちょうど酉年であったからに相違ない。そう考えるのが自然である。

酉年ということでは、江戸で駱駝の興行の行われた文政八年（一八二五）が酉年であり、その次の酉年は天保八年である。この『俳画冊』が「渡邊華山先生錦心図譜」などで云うように晩年期の作であろうとするならば、天保八年の作とも考えられないではないが、そうだとすると前掲の「夏の月駱駝の小屋のとれしあと」（第二十一号掲載）の句が出てくるのは、どうも不自然である。以上のことから私はこの『俳画冊』の制作年代を文政八年（一八二五）頃と見ることもできるのではないかとも思ってみたりもするのである。

ただ、そうかといって、これだけでは断定できないのではないかとこの『俳画冊』の一枚一枚は、華山が長年書きためてきていた俳画の中からいくつかを選び出して、晩年になってからこの二冊に編集したということも考えられるからである。例えば、この『俳画冊』にある華山の落款を見てみると、二枚

目の「鶯の身はかくれ居て鳴きにけり」（第十九号掲載）の句画と、二十一枚目の「襟さむしこんな夕にさへ雁は行」の句画だけに落款が附いている。そして、その落款が二つとも異なったものが使用されている。このことは、この二枚がそれぞれ違った時期に制作されたのではないか、ということを意味している。

もし、そうだとすれば、私の言うように、江戸で駱駝の興行の行われた文政八年（一八二五）ころではないかという推論は、やはり冒険だと言わざるを得ない。ただ、私が思うには、これら『俳画冊』の中でも、前掲の「夏の月駱駝の小屋のとれしあと」の句画のみは少なくとも、その句画の内容からして文政八年（一八二五）頃の作品とみているのではないかと、多くの識者のご意見をお聞きしたいものである。

二十五、松崎謙堂の「最楽」

以上、『俳画冊』二十四枚にわたって、気儘な鑑賞を楽しませていただいた。最後に、今一つ触れておきたい一頁がこの『俳画冊』には附いている。それがこの「最楽」と描かれた一枚の書である。

作者は、華山が儒学の師として仰いだ松崎謙堂（一七七一～一八四四）である。「明復」はその別号である。なぜこの一枚がここに加えられているかは不明であるが、華山の晩年、「壘社の獄」に連座し華山が入牢したとき、七十歳の老体で華山救免の建白書を出した謙堂の華山への誠意と温情を思うとき、この一枚が爰に添えられているとい

うことは、まことに意味深く、華山と謙堂という二人、謙堂筆「最楽」の人物の人となりとその交情のすばらしさに、胸が熱くなるのを覚えるのである。



よく見ると、この一枚は、一枚だけ紙の色が違っていている。そのことから見ると、恐らく後から付け加えた物であると思われるが、謙堂自身がこの『俳画冊』を所有して、座右の一書としていたとすれば、この「最楽」の一枚はまた、特別な意味合いをもったものとして、我々に訴えかけるものとなっている。

華山筆 松崎謙堂



この『俳画冊』が、華山の手を離れてどのような運命を経て、田原市博物館の所蔵となったのか私は知らない。しかし、今こうして我々が身近に鑑賞することができるということは、華山のどんな詳しい経歴を知ることよりも、貴くうれしいことである。なぜならば、昔から言うごとく、「故人の跡を求めず、故人の求めたることを求めよ」であるからである。この『俳画冊』一冊の中にも、私にとっては、掛け替えのない宝が隠れているように思われる。

研究会員 山田哲夫

田原市博物館からご案内

田原市博物館企画展

「田原の美術 新収蔵 仲谷孝夫展」

会期／五月十五日(金)～六月十四日(日)

開館時間／午前九時～午後五時(入館は午後四時三十分まで)

休館日／毎週月曜日

観覧料／一般 三〇〇円(二四〇円)

()内は二十名以上の団体の料金

小・中学生は無料

大正七年(一九一八)田原町西神戸に生まれた仲谷孝夫は京都市立絵画専門学校(現京都市立芸術大学)で、日本画を学びました。戦後は洋画に転向。昭和二十二年から郷里の田原中学校・成章高等学校教員をつとめながら、第6回行動美術展に初入選し、当地方を活動の拠点として制作・発表を行いました。その主題は、緑豊かな自然とともに生きる人々の姿で、半ば抽



私の「KOHDO」

象化された画面の中に自然が破壊される不安な世相を反映させながら、作品を描き出しています。行動美術協会の会友、会員となった仲谷孝夫は、平成十八年に88歳で逝去するまで制作を続けました。今回出身地の田原市で、初期作品や最晩年の行動美術展出品作品も含めて代表作を一堂に展覧いたします。

展示内容／流転() (第59回行動展出品)・私の「KOHDO」(第60回行動展/第61回行動展「遺作」、女(2枚組、第11回行動展)、他に中部行動展出品作品などが出品されます。

どが出品されます。

「催しものご案内」

ギャラリートーク／五月十七日(日) 午前十一時

田原市博物館学芸員 観覧料が必要

田原市博物館夏の企画展

生誕二〇年 書聖 鈴木翠軒展

会期／六月二十日(土)～八月十六日(日)

休館日／毎週月曜日、ただし、七月二十日は開館し、翌二十一日は休館

観覧料／一般 六〇〇円(四八〇円)

()内は二十名以上の団体の料金

小・中学生は無料

郷土出身で国定教科書の揮毫(戦前)や日展審査員、日本芸術院会員となり、文化功労者となった鈴木翠軒の生誕120年を記念する

展示内容／書作品をはじめ、愛用品等多数紹介。書・手本、書簡、愛用品(文房・落款印など)百二十点

今回の企画展の図録を販売します。価格一五〇〇円(税込)

この機会にぜひお買い求めください。

記念講演会／演題「現代書の流れと鈴木翠軒」(入場無料)

講師：出光美術館主任学芸員 笠嶋忠幸氏

七月四日(土) 午後一時三十分から 華山会館 展示解説／当館学芸員による(観覧料が必要)

六月二十七日(土)・七月二十六日(日)・八月九日(日) 午前十一時から



万葉集柿本人麻呂「ひむがしののにかぎるひの たつみえて かへりみすれば つきかたぶきぬ」

昭和四十九年

華山の田原行（六）

二月五日（続）

二月五日（続）

前回紹介した河合清右衛門、今回紹介する赤羽根の記述については、『参海雑志』の出發の四月十五日の項にも似たような記述があります。

「この原を通り富士見の茶屋とて憩ふべき家居あり」

比留輪原を通り、富士見茶屋へ行きます。富士見茶屋は『参海雑志』にも記述が見られ、高松町の一色の信号のあたりにあつた茶屋です。そこで華山は小酌し、赤羽根の浜に出ます。

「こゝに遠見番所とて異国船の往來を見出すべきために遠眼鏡いだしおかれ」

田原藩が遠見番所を設置した経過については次の通りです。

元文四年（一七三九）幕府の異国船に対する警戒が始まり、六月十七日に吉田藩百々村海辺に「仮番所を建て、遠眼鏡の台などができたというので、翌十八日田原藩から役人がこの工事を見分に出かけた。」（『田原町史』中巻六三二―三三ページ）



全樂同日録

そして、田原藩では、赤羽根と久美原に一カ所ずつ仮番所を建てることに決め、名古屋に遠眼鏡を注文します。「二十二日には久美原村と赤羽根村高札場に遠見小屋が建てられた。小屋は夜番小屋程度の一坪掘立小屋で麦カラ葺き板囲いの粗末なもの」（同書）しかし、見張りをする人手の関係や意識の低下からあまり省みられなくなったようです。

しかし、寛政四年（一七九二）のラクスマン来航により幕府の異国船来航に対する関心が高まり、田原藩でも遠見番所を復活させることにし、

谷ノ口と赤羽根に遠見番所を翌年一月に建てます。この年に生まれたのが華山です。

赤羽根の遠見番所は、現在の赤羽根町中村の海岸に設けられたようです。残念ながら、海岸線が当時より百メートルほど侵食されているようで、現在は、遠見番所の跡を見ることができません。

華山が訪れた時は、天気晴朗でしたが、「風波あしけれ」という状況のため漁は行われていませんでした。たまたま浜に出ていた漁師に、魚について話を聞きます。

「凡群れていたるもの八鰯なり。春より来、其あかく紫色を帯り、六月より八鰯、四月より八石モチなりとぞ」

出發の時に携えた酒肴は、単に自分たちで飲むだけでなく、情報への謝礼としても活用され、話を聞いた後は漁師に振舞われます。相手は領民なので、こんなことをする必要はないのに、華山の人間性が伺われます。

その後、浜辺をたどって池尻川まで行きます。よほど風が強い日だったらしく、「波さかまきておそろし」と記しています。

「此川浜砂の中をながれて潮ミつる時八川幅ひろく渡るにかたし」

現在、赤羽根港には池尻川と精進川が分かれて流れていますが、海岸線が南にあった当時は、二

つの川が合流し、華山の記述通りだったようです。池尻川を渡るうとする華山のもとに、この地の漁師が来て助けてくれます。その礼として、お金を与えます。

「浜麦といふ草あり、即筆くさなり。又、浜午房といふものあり、此根甚味アリとぞ」

家老になって初の田原滞在。華山は、以前の田原行とは異なつた観点で今回の旅を見たと思えます。江戸からの道中で見られた各地の産業の様子、藩内の自然や産業の様子。後に大蔵永常を招聘し、田原の特産物を開発しようとした政策。これらを考えると、華山自身の興味もあると思えますが、田原の殖産興業のために暗中模索した華山の様子が浮かび上がってきます。

「若見、越戸、鯉鮓ひさぐ家ありとて尋いたる」
同行の鈴木春山たちに聞いたのでしよう、たぶん越戸と思われませんが、うどんを商う家を訪ねます。最初の家は主人がいなかったたので辞します。その奥にも同様の家があったので訪ねます。老女ひとり暮らしの家ですが、うどんの粉はあるけれど茹でてないので少し待ってくれということでしたので、先を急ぐという理由で出ます。産業調査の目的も兼ねていれば、うどんの味を確かめたかったと思われませんが、この日は和地村まで行って戻らなければならなかったたので、時間もなかったたので

越戸の大山（若見町 中村一彦氏撮影）



でしょう。

越戸の様子についても記述があります。
「此地八いと暖にして麦茎を抽きて勢ひよし。これ八北の山ちかければ、西風あたためをもて、かくなりとぞ。山下の畑に鳴子引こや、そこはかとなく設ふけたり。是八山近く猪いづるをもてかくハせしとぞ。」

越戸の大山にある白山比咩神社には、現在も

「イノシシ注意」の看板があります。

各所で費やした時間が記していないのが残念ですが、二十キロ弱の道のりから考えると、昼過ぎに和地村に到着したと思われまます。

和地村では、中田孫兵衛という庄屋を訪れ小酌します。そして、この地で作っている海苔を所望します。「冬八百文に二帖、春にいたれば八百文に四帖六帖にも及ぶとぞ。」

田原に来る途中、大森、江戸、舞阪でも海苔についての記述が見られ、海苔は華山にとって関心のあることだったようです。

その後、浜に出て海の様子を観察します。そうこうするうちに日も暮れかけたので、岐路につきまます。この日華山が帰宅したのが子の刻です。午後六時に和地村を出発したとすると、六時間かかったことになりまます。疲労、その休憩、夜道ということから考えると、これくらいかかるのもかもしれません。

実際、途中で富士見茶屋で休憩しています。「つかれをやしのみ」のが目的です。遅い時間まで営業しているのも驚きですが、そこで、江戸で中間をしている助十という百姓の次男に会います。ひよっとしたら話がはずんだのかもしれない。

研究会員 柴田雅芳

(続)

東京都内 華山史跡を訪ねて

華山・史学研究会研修視察

平成二十年度華山・史学研究会研修視察は、十一月十五日、十六日の二泊二日で行われた。今回の視察は、東京都内のいろいろな史跡と華山ゆかりの史跡を訪ねるものであった。

当日は、絶好の旅行日和に恵まれ、御茶ノ水駅で合流した会員を含めて、今年度の参加者は七名となり、例年よりやや少な目であった。

最初に見学したのは、御茶ノ水駅近くの東京古書会館で、古典籍展観大入札会が行われていた。

膨大な量の古文書、絵画が展示されており、なかには七桁の値札が付いた軸物もあり、貴重な資料の山であった。

続いて、湯島聖堂を訪れた。「日本の学校教育発祥の地」の掲示板がある。徳川五代將軍綱吉は、儒学の振興を図るため、元禄三年（一六九七）湯島の地に聖堂を創建して、上野忍岡の林家私邸にあった廟殿と林家の家塾をここに移した。これが現在の湯島聖堂の始まりで、寛政九年（一七九七）には幕府直轄学校として昌平坂学問所が開設された。昌平とは、孔子が生まれた村の名前で、そこからとって孔子の諸説、儒学を教える学校の名前とし、それはその地の地名にもなった。後に現在

の筑波大学、お茶の水女子大学の前身である東京師範学校、東京女子師範学校がここに設置された。次に平河天満宮を訪れた。江戸平河城主太田道



灌が、ある日菅原道真の夢を見、翌日、道真直筆の画像を贈られたこともあり、それを霊夢と感じ、文明十年（一四七八）に天満宮を建立したのが始まりである。徳川幕府を始め、紀州・尾張両徳川家、井伊家等の祈願所となり、新年の賀礼には、宮司は將軍に単独で拜謁できる格式の待遇を受けていた。また、学問に心を寄せる人々は、古来より深く信仰し、名高い盲目の学者塙保己一や蘭学者高野長英等の逸話が今日に伝えられている。現

在も学問、特に医学や芸能、商売繁盛等の祈願者が多数訪れている。

今回の旅行の目玉である渡辺華山誕生の地は、永田町駅に近い青山通りと内堀通りが交わる三宅



坂交差点の小さな公園内にある。大手広告代理店が建設した三人の裸婦像の裏に、「渡辺華山誕生地」という立て看板があり、「渡辺華山は通称を登といい、寛政五年に三宅備前守藩邸内に





生まれ、大部分をここですごしました」と説明されている。雨ざらしのせいか文字が消えかかっており、華山ゆかりの地の人間にとっては寂しかった。

その後、衆議院憲政記念館を訪問し、「怒濤の幕末維新」特別展を見学したが、展示、映像等大いに研修が深まった感じがした。

宿は両国に取ったので、夕食はちゃんこ鍋ということに決まった。「華山会報 第二十号」に玉稿を寄せられた目白大学の鈴木章生准教授紹介の店で、おいしい料理に舌鼓をうちながら楽しい一時を過ごした。



翌朝一番に訪問したのは、回向院である。阿弥陀如来を本尊としており、明暦三年（一六五七）の江戸の大火により、幕府が約十万人八千人の焼死者を本所牛島新田に埋葬し、塚を築いたのが始まりである。その後、安政の大地震、関東大震災等の犠牲者や処刑者、行路病死者も葬られている。

また、勸進相撲が開催されたこともあり、「力塚」がある。相撲の興行は、当時は寺社奉行の管轄であった。勸進相撲の名が示すように、寺社修復の費用を賄うとの名目で寺社の境内で開催された。女の見物は許されず、観客は男だけであった。

おもしろいことに、ここには「鼠小僧次郎吉」の墓がある。鼠が物も引くという、この引くというのが、無尽のまじないの迷信を生じ、縁起を担いで、鼠小僧の墓石を欠いてその一片を懐中していけば無尽があたるとの風説が広まり、墓石欠きが横行した。現在では、その理由、御利益も無尽ではなく、ギャンブルに勝つ、受験に合格する等に変わっており、欠き取り用の代理墓石まで設けられている。

最後に訪問したのが、吉良上野介邸跡である。上野介は、刃傷事件後、本所松坂町に屋敷替えとなった。これは、万一、赤穂浪士たちが上野介を討ちに来た際に都心で騒ぎを起こされないように、幕府が敢えて本所という当時としては新興住宅地を選んだ。当時本所の外れ深川に庵を結んでいた松尾芭蕉は、「秋深し 隣は何を する人ぞ」という句を詠んでいる。敷地は東西七三間、南北三五間あった。今は、当時の八六分の一の広さで、本所松坂町公園として吉良邸跡の一部が残っており、赤穂浪士が上野介の首を洗ったという「首洗いの井戸」がある。

その後、江戸東京博物館で「江戸博ボストン美術館 浮世絵名品展」を鑑賞し、以後、自由解散となり、充実した研修視察の旅を終えた。

研究会員 藤城精一

財団法人華山会
田原市博物館 から
ご案内

企画展のご案内

五月十五日(金)～六月十四日(日)
企画展「田原の美術 新収蔵
仲谷孝夫展」 (企画展示室)
同時開催 渡辺華山と弟子たち
の花鳥画 (特別展示室)

六月二十日(土)～八月十六日(日)
夏の企画展「生誕二二〇年 書
聖 鈴木翠軒展」 (企画展示室)
同時開催 渡辺華山の書
(特別展示室)

右記の企画展は11ページをご覧ください。

八月二十二日～十一月八日
秋の企画展「能に見る日本の女性
像 能装束・能面の世界」
(特別・企画展示室)

重要文化財渡辺華山筆一掃百態
図・重要美術品客坐掌記や唐織約
40点、摺箔12点、長絹約10点、能
面20点、他に江戸時代から現代の

画家らによる能場面を描いた作品
も展示します。

期間中、能公演や能装束について
の講座や月見会などを予定していま
す。詳しくはポスター・チラシ等で
ご紹介します。



唐織 垣に秋草文様 段替り



能面 小面 江戸時代中期
出目庸久作

平常展のご案内

三月二十七日～五月十日

渡辺華山の新収蔵作品を中心に
(特別展示室)
田原市博物館新収蔵品展
(企画展示室)

常設展示室では渡辺華山の生涯を
紹介しています。
民俗資料館では田原の暮らしを中
心に展示しています。
渥美郷土資料館・赤羽根文化会館展
示室でも所蔵品を展示しています。

観覧料

企画展
一般 三〇〇円(二四〇円)
夏・秋 六〇〇円(四八〇円)
平常展
一般 二二〇円(一六〇円)
小中生 一〇〇円(八〇円)

()内は二十名以上の団体の料金
企画展期間中・毎週土曜日は小
中生無料
毎週月曜日は休館、月曜日が祝日の
場合は翌日、展示替日

(財)華山会から
華山・史学研究会会員募集中

申込場所 華山会館事務室
毎月第四土曜日研究会
視察研修年一回に参加できます。

田原市博物館友の会会員募集中
入会申込書に年会費千円を添えて
お申し込みください。

特典

博物館への無料入館
展覧会・催し物のお知らせ
見学会に参加できます。
博物館日より(年三回)・華山
会報を郵送します。

華山会報 第二十二号
平成二二年四月一日発行
編集発行 財団法人華山会
理事長 白井孝市
事務局長 山田憲一
千四四一―二四二二
愛知県田原市田原町巴江二二の一
FAX TEL 五三二・二三二・一七
五三二・二三二・一七一

編集・協力
田原市博物館
華山・史学研究会
会長 渡辺巨祥
吉川利明 林 和彦
山田哲夫 別所興一
藤城精一 加藤克己
中神昌秀 中村正子
小川金一 柴田雅芳
林 哲志
華山会報ご希望の方は華山会館・
田原市博物館にお申し出ください。
次回発行予定 平成二二年十月二日